

演題番号：C14

恐怖性／防衛性攻撃行動の猫に行動修正と抜爪を実施した猫の1例

○中野あや^{1) 2)}，泉 有希²⁾，植田茉莉香²⁾，上田憲吾²⁾，松阪仁美²⁾，井本大志²⁾，梶山薫乃²⁾，大原朋洋²⁾，佐々井浩志²⁾

¹⁾ 動物行動クリニックなかの，²⁾ 北須磨動物病院

1. はじめに：人に対する猫の攻撃行動は一度で重度の損傷を与えるとともに、易興奮状態が数日間続く猫の特性から、短期間に誘発刺激と攻撃対象が増え家族の心にも大きな傷と恐怖を与えうる。一方でこの興奮が沈下すると完全に日常行動に戻り、しかしまた突然重度の攻撃を呈するという猫にしばしば遭遇する。今回、我々は家族に対して繰り返された猫の攻撃行動に、行動学的治療および抜爪と犬歯切断を併用する機会を得たため、これが飼い主の心に与えた影響について検討した。

2. 材料および方法：症例は猫、アメリカンショートヘア、避妊雌、4歳。50代の飼い主とその娘、孫と生活。3歳11カ月時、トランポリンを跳んだ孫に対して初めて攻撃し、1週間攻撃が続いた。その3カ月後にも激しい攻撃で家族に怪我を負わせ行動診療を受診。恐怖性／防衛性攻撃行動と診断し、行動修正により4カ月間おだやかに暮らしたが、アクシデントから再度激しい攻撃を呈したため、クロミカルム 0.25mg/kg sidを開始、完全ケージ飼育とし、抜爪と犬歯切断を実施した。

3. 結果：術後、症例猫は攻撃することなく生活していた

が、娘が試しにケージから出した際に以前と同様の勢いで飼い主と娘に襲いかかった。以降、娘は症例猫への恐怖が再燃したが、飼い主は攻撃による外傷が生じなかったことで恐怖感が消え、猫との生活を楽しめるようになった。娘に対してケージ内から威嚇が続いたことから再度環境の見直しを実施し、現在、娘と症例猫の関係はケージ越しで良好に経過している。

4. 考察および結語：猫の抜爪は、近年、動物愛護の観点から成書においても否定的に記されるものもあり、重度の攻撃行動の猫においても推奨しない獣医師もいる。しかし、猫は行動と生活スタイルの特徴から攻撃行動の制御が非常に難しく、想像以上の重傷を与える。「飼い主が緊張した瞬間に豹変する」というエピソードも多く、攻撃行動の制御には飼い主の恐怖心のコントロールが必須であり、これが攻撃行動の管理を複雑化させる。本症例では、抜爪が飼い主の恐怖感を消失させ攻撃行動を減じることに繋がり、短期間に飼い主と猫のQOLが改善した。一方、術後も猫を驚かせ続けてしまった娘の恐怖感変わらず、行動学的に寄り添うことも重要であった。飼い主と猫の最善を考える時、獣医師が抜爪の選択肢を持ち続ける必要性について今後も考えていきたい。